

Ⅳ 英語の授業のあり方と若干の提案

倉田有邦

1. 昨年度の反省と本年度の試み

昨年度は、初めての試みとして、高1生徒を対象に、英数組み合わせによる能力別編成授業を、また中3生徒を対象に、2クラス分を3クラスに等質分けした小人数級編成をそれぞれ実施した。そしてそれについての生徒の反応は大ざっぱに言って、高2においては不評、中3においてはまずまず好評といったところであり、この間の事情は昨年度(44年)の紀要に述べた通りである。

本年はその反省に基づき、引き継ぐに価するものだけ実施することになった。結局、能力別編成は新高1にも、新高2にも実施しないことになり、例年通りの普通クラス編成になった。一方中3については、昨年度に引き続き、本年度も2クラスを3等分する方式をとることにした。ただ高2において昨年の方式を続けなかったことについては、一部の父兄から疑問が出され、この種の問題はどのような形をとっても必ず注目関心的になることを示した。

2. 本年度の成果

中3の3クラス同時展開方式においては、昨年度の反省に基づき、各クラスの進度を合わせるようになり気を配った。昨年も述べたことであるが、ホームルーム単位の2クラスで行なう場合より、教師の目がよく行きとどき、生徒の掌握が深まり、説明の浸透度もよいことは、教授者それぞれが感じている。授業能率の向上と同時に、教師の疲労度が幾分軽減されることも確かなようである。本年度の各クラスの人配分は(30, 31, 31)であるが、四十数名を相手にした授業とはかなり違った雰囲気を感じられる。教師の定員と時間の関係で、一つの学年にしかこの方式が実施できないのは残念なことである。

ただここで注目すべきことは、生徒の方ではさほどこの方式の成果を認識してはいないということである。これは、昨年と同一のアンケート調査をしてみてもわかったことであるが、次のような結果が出たわけである。

A. 現行の方式でよいと思われる点(箇条書き)

主なものは、説明がよくきける、よく当たるから手が抜けない、小人数のため落ち着いて勉強できるなど。これはわれわれ教師と同じ感じ方をしているわけで、昨年も同様であった。

B. 悪いと思われる点

クラスにより説明の仕方、練習のさせ方などが異なる、テストの時の作成者により有利不利がでる、教室の条件が悪い(1クラスはやや広い特別教室を使っているため)、教室が変わるので落ち着きが悪いなど。

C. 前記A・Bを総合した上で、現行の方式は、

| | |
|-----------------|---------|
| ア. 非常によい | 6 (5) |
| イ. まあまあよい | 47 (42) |
| ウ. 2クラスの時と変わらない | 12 (16) |
| エ. むしろよくない | 18 (15) |
| オ. 非常に悪い | 6 (5) |

()内は昨年度 計 89 (83)

われわれにとって意外だったのは、このCにおける生徒の認識が昨年とほとんど変わらないということである。昨年度は約四分の一の生徒がこの方式に不満足である原因をもっぱら進度の不ぞろいであった点に求めたわけであるが、この点にはかなり注意した本年においてなおかつこのような受け取り方をしている生徒が少しも減っていないということは、原因がもっと深いところにあることを示すものであろう。これらの生徒が挙げている理由をみると、そのほとんどが「教え方」が三者三様であり、試験の際の問題作成者により有利不利がでることを指摘しているが、これらの「少数者」の感じ方には、このクラス編成の欠陥ないしは指導の不備よりも、点数にこだわるゆがんだ競争意識があらわれているとみるべきであろう。やはりここでは、この方式を支持している者が60%いることでもってまず成功とみた方がよさそうである。

次に、昨年度英数能力別編成を行なっていて、本年はとりやめた現在の高2の現状をみると、一番目立つのは上下格差のひろがりである。もともと各自の能力を最大限のばすことが目的で、学力差をちぢめることは必ずしも第一義的には考えられていなかっただけにこの結果はむしろ当然ともいえる。ここで改めて考えなければならないことは、能力別指導の可否を論ずる場合、その教科の目標・意義は何かということを確認しておかねばならないということである。以下それについて少し述べてみたい。

3. 基礎教科の意義(特に英語について)

英語や数学のようないわゆる基礎教科(内容教科に対する)において、その教科の意義と考えられること

は、大別して2つに分けて考えられると思われる。

- (1) その教科の知識・技能の修得
- (2) 人間形成の一環として、望ましい考え方・態度の育成

この両者は本質的にはむしろ不可分のものである。しかし、これを対等に成就させることがいかに難しいことであるかは、平素の授業を通じ常に痛感させられるところである。筆者の場合、英語の授業を通し、常に(1)を第一義とし、(2)を附随的なものとして扱ってきたわけである。かりにこの主と従の関係を逆にした場合一体どういうことになるであろうか。極度に能力差のはげしい英語の技能は、現実に生徒の卒業後の進路の選別に大きな役割を果していることは否定できない。このことは(1)の目的と(2)の目的がやりようによっては互いに矛盾し合うこともあり得ることを意味する。能力別編成の趣旨は(1)の目的をより徹底させるためのものであることはもちろんである。この場合(2)の目的の方がお留守になる危険性は十分にある。しかし半面(2)の目的を優先させた場合はたしてどれほどの技能が期待できるのか、現実にはなほ貧弱な生徒の語学力をみるにつけ疑問に感ぜざるを得ないのである。

4. 二つの提案

ここで先に述べた二つの目標を両立させるための方策を英語について考えてみたい。筆者はやはり(1)の目標をまず第一義とみなすものであるが、(2)のようなより高次元の目標につながるものでなくてはならぬと考えている。そのためには現在のような天井知らずの受験競争を何とかしなければなるまい。常に人より余計に知識・技能をつけなければならない「競争」という条件の下では、望ましい人間関係、豊かな人間性などにつながって行かないからである。

提案はごく簡単なことである。(実施するのは簡単ではないであろうが)英語を現在のような入試科目からはずして一種の資格検定制度にしたらよいと思われるのである。資格試験である以上、定員にしばられることはなく、ある一定の水準に達していさえすればそれ以上点数を争う必要もない。検定を行なう主体は別途に考える必要があるが、少なくとも官製のものや、企業の息のかかったもの(この検定試験なら現在

行なわれている)であってはなるまい。資格にはある程度段階をつけた方がよいであろうが、これが多過ぎると競争試験に近くなる。大学受験に関しては、この一定資格を有することを条件とし、原則として(外国語科などは別であろう)入試科目からははずすことにすればよいと思われる。技能第一主義の原則は変らなくとも、現在のような一点を争う過当競争を解決することはできるようになるであろう。そしてまた一方では、大学入学資格ばかりでなく、それ以前の段階として高校卒業資格といったようなものも考えられるのではなかろうか。今日大学入試についての苛酷な競争は周知の事実であるが、その半面、3年間およそ勉強らしきものは何一つやらず、知識の修得は事実上ゼロに等しいような生徒がかなりいること、そしてそれらの生徒の大部分が落第もせず無事卒業し、大学へ進学する者もかなりある、という事実も厳として存在することは何人たりとも否定できないであろう。不当に厳しい競争試験と同時に、このような無定見なトコロ天卒業も是非やめるべきであると考ええる。英語の学習にはある程度の厳しさが必要であり、ある一定の水準を目ざして努力する過程の中に、より高次元の思考や態度が養われるものであると思うのである。

もう一つ提案したい。これは中学高校を通じ、少なくとも英語の授業については(他の教科でもそうかもしれないが)一クラス当りの生徒数を最大限30人位までとすること。無論大幅に教員数をふやさねばなるまい。そして教室も。しかし欧米諸国ではどうにやっていることである。少人数クラスの能率がよいことは、本校のわずかばかりの実験的試みの中でも十分言えることである。現在のように、中高6年間のうち年間のうち中3だけに試みるだけでは気休めに過ぎないともいえる。

以上二つの提案は余りにも英語という科目のみに焦点を合わせ過ぎていることは認めねばなるまい。しかし今日英語の授業のあり方が生徒の日常生活に与える影響は、よきにつけ悪しきにつけかなり大きなものがあることは無視できないし、いわば受験体制と人間教育の矛盾が大きくしわ寄せされている科目であるが故にあえてとり上げた次第である。